



Title	多文化社会アメリカにおけるエスニック・スタディーズの行方：カリフォルニア大学バークレー校から
Author(s)	玄, 由美子
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 267-277
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

多文化社会アメリカにおけるエスニック・スタディーズの行方

—カリフォルニア大学バークレー校から—*

玄 由美子**

While I was studying at the University of California, Berkeley, between August 1998 and May 1999, I witnessed a student strike to save the Department of Ethnic Studies at that university. In this paper, I examine how ethnic studies started in the United States and recent controversies and movements over ethnic studies, and I consider the contribution of ethnic studies to multiculturalism in American society today. I also discuss the implications of American multiculturalism for Japanese society.

Ethnic studies in Berkeley started in 1969, spurred by a strike by various minority students who organized the Third World Liberation Front to establish an academic institution reflecting histories, cultures, and experiences of minority people. The success of the movement was reflected in the adoption of a requirement that all students enroll in “American Cultures” courses offered through various departments. However, this has undermined the uniqueness of the Ethnic Studies Department and caused a reduction in the number of its students. Furthermore, there has been a political backlash opposing the treatment of race as a central issue. The chair of the Ethnic Studies Department recently proposed to merge ethnic studies with American studies to strengthen ethnic studies and to redefine American identity. On the 30th anniversary of its establishment, students began fighting to defend ethnic studies and

* Ethnic Studies at the University of California, Berkeley: Its Future Implications in Multicultural American Society (HYUN Yoomi-ja)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

finally won their demands. Their movement received broad support on campus and across the country.

Ethnic studies has contributed to multicultural American society. Firstly, it questioned the definition of “American” and sparked a reform of the Eurocentric curriculum. It revealed the unjust foundations of society and shed light on minority contributions to the development of American society. Secondly, it has tried to serve the needs of minority communities and aimed for minority empowerment. Thirdly, ethnic studies began questioning oppressions not only between racial and ethnic categories but also within them. It started to deal with diversities within diversities such as class, nationality, generation, religion, gender, and sexuality.

In Japan, where homogeneity has been celebrated as a major factor of its development, minority people have been made invisible. It is necessary to reveal minority contributions to Japanese society. Japan also has its own history of movements to defend minority cultures and identities against assimilational policies to strengthen a myth of homogeneity. We should search for possibilities to respect diversities in Japanese multicultural society and enable various minority people to participate as its visible members.

1 はじめに

博士後期課程に進んでまもなく、1998年8月から1999年5月まで、私はアメリカのカリフォルニア大学バークレー校にて留学する機会を得た。私の受け入れ先となったエスニック・スタディーズ学科は、学部と大学院からなる独立学科で、アジア系アメリカ人研究、メキシコ系アメリカ人研究、先住アメリカ人研究、比較エスニック研究から成っている¹⁾。アメリカ滞在も終わりに近づいた4月、このエスニック・スタディーズを守るための学生ストライキが繰り広げられた。ア

¹⁾ アフリカ系アメリカ人研究は、かつてはエスニック・スタディーズ学科に含まれていたが、現在は独立した学科となっている。

メリカは多民族国家であるが、その国家統一理念は時代とともに変遷してきた²⁾。同化主義は排除と抑圧をもたらすものとして退けられ、それに代わって文化的多様性を尊重しながら統一を目指す文化多元主義が登場し、多文化社会に順応するような社会組織や教育制度の変革によって主流社会を変えていこうとする多文化主義が現れた。本稿では、エスニック・スタディーズが設立されるようになった歴史的経緯とそれをめぐって近年どのような論争と運動が行われたのかを分析し、その意義を見直すことによってアメリカにおける多文化主義の現状を考察したい。また、エスニック・スタディーズや多文化主義を生みだしたアメリカ社会の経験に照らし合わせて、日本社会の今後の課題についても検討してみたい。

2 エスニック・スタディーズをめぐる運動

2.1 エスニック・スタディーズの創設

まず、カリフォルニア大学バークレー校において、いつ、どのように、何の目的でエスニック・スタディーズが設立されたのだろうか。1968年から1969年にかけて、サンフランシスコ州立大学とカリフォルニア大学バークレー校において、アフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、先住アメリカ人の学生たちが「第三世界解放前線」(the Third World Liberation Front、以下 TWLF とする)を結成し、「第三世界学生ストライキ」(the Third World Student Strike)を行った。TWLF は西洋中心の学問のあり方を批判し、マイノリティの歴史と経験を反映した教育機関の設立を求めた。当時、民族の独立と自己決定権を求めて巻き起こっていた国際的運動を背景に、学生たちは「第三世界」という概念を、先住民虐殺、黒人の奴隷化、アジア系移民の排除、南西部のメキシコ人の植民化など、アメリカのさまざまなマイノリティが共通して体験してきた人種抑圧と、またその背景となった近代の西欧による世界的な植民地化の歴史にも適用し、自らをアメリカ国内の被植民者、被抑圧者として団結を成し遂

²⁾ 1990年国勢調査での自己申告によるアメリカの人種・民族構成は、白人75.6%、黒人12%、先住民0.8%、アジア系2.9%、ヒスパニック8.4%であり、これを1980年と比較すると、白人79.9%、黒人11.6%、先住民0.7%、アジア系1.6%、ヒスパニック6.1%で、非白人人口が急速に増加していることがわかる。U.S. Bureau of the Census. *1990 Census of the Population, General Population Characteristics, United States Summary, CP-1-1*. Washington, DC: U.S. Government Printing Office, 1993.

げた³⁾。まずストライキはサンフランシスコ州立大学で起こり、それがバークレー校に広がった。バークレー校のストライキでは、緊急非常事態が当時のロナルド・レーガン知事によって宣言され、警官隊のみならず州兵軍まで動員されて、総計155人以上が逮捕された⁴⁾。しかし闘争の結果、全国に先駆けてサンフランシスコ州立大学とカリフォルニア大学バークレー校においてエスニック・スタディーズのプログラムが開設されることになった。

2.2 エスニック・スタディーズの危機

ところが1998年4月、エスニック・スタディーズ創設者の1人でありその学科長でもあるリンチー・ワンは、エスニック・スタディーズとアフリカン・アメリカン・スタディーズをアメリカン・スタディーズと併合させて1つの学科とする提案をした⁵⁾。そこには、エスニック・スタディーズ存続の危機感を生みだした2つの背景があった。

まず1つは、1989年3月に実現したバークレー校における「アメリカ諸文化論」の必修化である。これによって、どの分野の学部生にもアフリカ系アメリカ人、先住アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、アジア系アメリカ人、そしてヨーロッパ系アメリカ人の5つのエスニック・グループのうちから少なくとも2つのグループを比較研究することが義務づけられた⁶⁾。「アメリカ諸文化論」の必修化は、人種とエスニシティを扱う授業を大学全体に広め、これまでのマイノリティを軽視したカリキュラムのあり方を改善する役割を果たした。これはエスニック・スタディーズの目的にかなうものであったが、同時にエスニック・スタディーズを専攻しなくても他学科で人種とエスニシティに関する勉強ができるようになったため、その独自性がおびやかされることにもなった。エスニック・スタディーズ専攻者の数は1990年代初めピーク時の約400人から200人以下へと半減してしまった⁷⁾。

³⁾ Dong, Harvey. "Third World Student Strikes at SFSU&UCB: A Chronology." JUNE 29, 1998. (<http://www.ethnicstudies.com/history/chronology.html>)

⁴⁾ 同上。

⁵⁾ Wang, Ling-Chi. "A Proposal to Transform Ethnic Studies into American Studies." April 29, 1998.

⁶⁾ 必修化の詳しい経緯については、野口道彦「エスニック・スタディの必修化と新保守主義—カリフォルニア大学バークレー校の場合—」(『解放社会学研究4』明石書店、1990年)を参照。

⁷⁾ Asianweek. September 17, 1998. 他方、アメリカン・スタディーズは学科とはなっていないが、他学科の授業を組み合わせるカリキュラムを作ることのできるその学際性と柔軟性が人気を博し、数年のうちに300人以上の専攻者を持つまでに成長していた。

そしてもう1つは、人種を中心として扱うことに反対する政治的風潮である。1995年7月、バークレー校を含め9つの分校を管轄するカリフォルニア大学理事会は、入学者選抜と職員採用におけるアファーマティブ・アクションを廃止することを決定した⁸⁾。この結果、アフリカ系アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、先住アメリカ人のバークレー校への入学者数は3分の2も減少した。マイノリティ入学者の減少は、エスニック・スタディーズ専攻者の減少にもつながった。カリフォルニア大学理事会でアファーマティブ・アクションの廃止を提案した黒人理事のワード・コネリーは、エスニック・スタディーズ批判の主砲ともなって、人種とエスニシティを学問の基礎とする研究が人種分裂を生み出し人種差別主義を永続させるのだと主張している。これに対してエスニック・スタディーズの擁護者たちは、エスニック・スタディーズは人種分析を通して人種差別主義を支持しているのではなく、それに反対するような社会理解を促進してきたのであり、人種の不平等は有色人種に対して差別的な法律や政策によって維持されていると反論し、コネリーは人種差別のない社会は無知によって達成され则认为しているのだと批判している⁹⁾。

ワンの提案は、アメリカン・スタディーズとの併合によってエスニック・スタディーズとアフリカン・アメリカン・スタディーズは強化され、アメリカで最も多様で質のよいカリキュラムを提供できるようになるという利点をあげた。また、併合によってアメリカ人のアイデンティティを人種とエスニシティ中心に再定義することができるとした。この併合案をめぐるなされた論議では、ワンのアメリカを再定義するという意図はおおむね理解され賛成の声もあったが、意図はよくてもアメリカン・スタディーズは本質的に西欧中心主義に根ざしているという意見や、自己決定権が損なわれるのではないかという反対意見も出た¹⁰⁾。

⁸⁾ 1964年に成立した公民権法が法律上の平等を保障するようになってから、過去の差別を乗り越えて実質的な平等を達成するため、マイノリティや女性の雇用、昇進、教育などにおける積極的優遇措置が奨励されてきた。しかし、1980年代になると、アファーマティブ・アクションは集団主義にもとづく結果の平等を追求して個人の機会の平等をおびやかす、逆差別を引き起こして人種間の緊張を高める、黒人間の貧富の差を拡大して貧困層を助けない、黒人の劣等意識を助長するなどと批判され、その廃止を求める動きが出始めた。1996年11月にはカリフォルニア州の住民投票でアファーマティブ・アクションを撤廃する提案209号が可決された。

⁹⁾ コネリーによるエスニック・スタディーズ批判をめぐる論争については <http://www.ethnicstudies.com/press/press1.html> を参照。

¹⁰⁾ *The Daily Californian*. October 26, 1998.

2.3 学生ストライキの再燃：エスニック・スタディーズを守る闘い

ここでエスニック・スタディーズを守るために立ち上がったのは学生だった。エスニック・スタディーズ設立30周年を迎えて、1999年4月14日正午に記念集会が開かれ、攻撃され存続の危機にあるエスニック・スタディーズを救うため、バークレー校に再びTWLFによる学生ストライキが再燃した。エスニック・スタディーズは予算削減によって、来学期には8つの授業の開講がキャンセルされ、翌年にはフルタイムの教授が先住アメリカ人研究ではゼロ、メキシコ系アメリカ人研究では1人となることになっていた。集会後、抗議学生たちはエスニック・スタディーズのオフィスのある建物に立てこもり授業を休講させたが、10時間にわたる占拠後、警察によって暴力的に退去させられた。これによって1人の学生が耳を少し引きちぎられて病院に運ばれたほか、46人が不法侵入で逮捕され、このうち逮捕に抵抗した5人が投獄された¹¹⁾。翌日も学生たちは、エスニック・スタディーズへの資金の増額、終身在職権を持つ教員の増員、エスニック・スタディーズ研究センターと多文化学生センターの設立、抗議学生に対する処罰の免除などを要求して抗議運動を続けた。これに対してロバート・バーダール学長は、強制的な要求をのむことはできず処罰の免除もしないとし、またエスニック・スタディーズの資金にも教員にも削減はなかったと主張した¹²⁾。

4月29日、6人の学生が自分たちの要求に大学が譲歩するまでは食べないことを誓い、エスニック・スタディーズを支持する多くの学生と共にバーダール学長のオフィスのあるカリフォルニア・ホール前でキャンプを行いながらハンガー・ストライキを開始した。学長はエスニック・スタディーズの教員たちと会合し、エスニック・スタディーズの重要性を認めてTWLFの要求をほぼのむような提案を5月2日に出した。しかし、その提案の受諾期限が早急であり、以前にも約束がなされて果たされてこなかったことから不信感を根強く持っていた学生らはそれを拒絶して、自分たちの要求が十分にこたえられるまでストライキをやめないとした。これに対してバーダール学長は、ハンガー・ストライキが中止されるまではもはやいかなる交渉も行わないと宣言し、5月4日未明には、警察がカリフォルニア・ホール前でキャンプ中の学生たちを襲撃してキャンプ場を「違法集会」であるとして取り壊し、83人を逮捕して午後まで投獄した¹³⁾。しかし、平

¹¹⁾ *The Daily Californian*. April 15, 1999.

¹²⁾ *The Daily Californian*. April 16, 1999.

¹³⁾ *The Daily Californian*. May 6, 1999.

和的なデモに対する武力弾圧はバーダール学長への批判を高め、より多くの学生らがカリフォルニア・ホール前に集まるようになった。エスニック・スタディーズを守るための学生ストライキが大学内外からの大きな支持を得る中、5月7日、バーダールは初めて学生の代表を含めてエスニック・スタディーズの教員らとTWLFによる提案について話し合うことを認め、交渉の結果ようやく合意に達し、8日間のハンガー・ストライキに終止符が打たれた。これによって学生側の要求が全面的に認められ、これまで放置されてきた6つのフルタイムの欠員を補填してさらにポストを2つ増やすこと、カリキュラムを維持するのに十分な資金を割り当てること、人種とジェンダーに関する研究センターと多文化学生センターを設立することなどが約束された¹⁴⁾。

3 エスニック・スタディーズの意義

このように保守派の批判を受けながらも、多大な支持を受けているエスニック・スタディーズの意義は何だろうか。第1に、アメリカという国のあり方、そしてアメリカ人とは何かということをマイノリティの視点から問い直すことだろう。エスニック・スタディーズはヨーロッパ中心的な学問のあり方に異議を唱え、アメリカ社会の根底にある人種差別と抑圧を問いだしながらマイノリティの歴史と文化を研究する。パークレー校エスニック・スタディーズの著名な歴史家ロナルド・タカキは、アメリカの人種分裂を憂慮して多文化主義を攻撃し西欧中心主義に回帰しようとする論者に対して、逆にアメリカの矛盾は、「限りなく多様化したわれわれ自身の自己否定」であり、文化覇権主義的なヨーロッパ中心主義こそが実際にアメリカを分裂に追いやっているのだと非難する¹⁵⁾。彼は、多様な人種と民族からなるアメリカ人の平等を求める闘争を歴史の中心テーマとし、アメリカを「別の鏡」に映すことを試みている。それは“the history”(大きな歴史)を解体し、“histories”(小さな複数の歴史)を掘り起こすことにはかならない。アメリカの歴史では、主役は白人でマイノリティは端役なのではない。アメリカの歴史が研究されるにおいて声を与えられていなかったマイノリティに焦点を当て、政治的、経済的、社会的抑圧を被りながらも差別に立ち向かいアメリカ社会

¹⁴⁾ *The Daily Californian*. May 10, 1999.

¹⁵⁾ ロナルド・タカキ『多文化社会アメリカの歴史：別の鏡に映して』（明石書店、1995年）714-715ページ。

の発展に貢献してきたマイノリティの経験を浮き彫りにすることは、エスニック・スタディーズがこれまで果たしてきた非常に重要な意義である。

第2に、マイノリティのエンパワーメントを目指していることである。エスニック・スタディーズ設立ストライキの要求の2つの根幹は、マイノリティの自己決定権と大学を通じたコミュニティへの奉仕だった¹⁶⁾。創設運動者たちは、コミュニティへ貢献するためにその必要に取り組むことのできる場所を大学に求め、学問はコミュニティから切り離されてあるべきではないと主張した。その1つの例として、サンフランシスコのインターナショナル・ホテルからの住人立ち退き反対運動があげられる。1968年、サンフランシスコの開発が進み商業地区の中心街にあったインターナショナル・ホテルが取り壊されることになり住人に対する立ち退き命令が出されたのに対して、サンフランシスコ州立大学とカリフォルニア大学バークレー校の TWLF は立ち退き抗議運動を展開した¹⁷⁾。コミュニティから離れた学問となって、コミュニティへの貢献というエスニック・スタディーズの本来の意義が現在薄れてきているという批判もあるが、それはなおエスニック・スタディーズの重要課題とされている。

第3に、エスニック・スタディーズは、カテゴリー間だけでなくカテゴリー内部に存在する権力構造、そしてエスニック・アイデンティティを固定的なものともみなす危険性をも問題化する方向性を持っている。マイノリティのエンパワーメントの枠組みは、白人対マイノリティという単純なものではなくなっている。エスニック・グループ内にも存在する階級、国籍、世代、宗教、ジェンダー、セクシュアリティなどのさまざまな差異と抑圧も問題とされるようになってきている。例えば、「アジア系アメリカ人」とひとまとまりにいてもその多様性は大きく、「モデル・マイノリティ」というレッテルを十把一絡げにあてはめることは危険である。エスニック・コミュニティにおける女性や子どもの労働搾取や混血者に対する差別にも目が向けられ始めている。リサ・ロウは、アジア系アメリカ人の

¹⁶⁾ *The Daily Californian*, October 26, 1998.

¹⁷⁾ インターナショナル・ホテルは、1920年代から30年代にかけてフィリピンからの移民季節労働者のコミュニティが栄えていた所にあり、当時アジア系女性移民が法的に禁じられていたため独り身であることを強いられた貧しいフィリピン系の独身年輩者が多く住む安い居住ホテルであった。1977年に警察の武力によって立ちのきが強行され、インターナショナル・ホテルは取り壊されたが、その地所は空き地となり、長年の交渉の末、新しいインターナショナル・ホテルの建設が予定されている。詳しい経緯は、Salomon, Larry. "No Evictions. We won't move!: The Struggle to Save the I-Hotel." (*Roots of Justice: Stories of Organizing in Communities of Color*. Berkeley: Chardon Press, 1998) を参照。

アイデンティティは固定的で所与のものではなく、歴史的そして物質的な違いに関連して常に構成され続ける未完物であり、そのようなアイデンティティを生み出す「アジア系アメリカ人の文化的実践」という過程を考察すべきであると指摘している¹⁸⁾。ロウは、アジア系アメリカ人の文化の特徴として、アジア系アメリカ人の間にある「異質性」、文化の「雑種性」、資本主義・家父長制・人種関係のような権力構造のもとで決定づけられる主体の社会関係における位置づけの「複合性」の3つを強調している。またマイケル・オーミとホワード・ワインナントは、人種は社会理解と運動の中心的原则として扱うのに有効としながら、それを固定的で本質的なものとみなすことから生ずる問題点を回避するために、人種を生物学的に本質的なものではなく歴史的社会的文化的な構築物であるとし、「人種化(racialization)」という概念を使うことを提唱している¹⁹⁾。エスニック・スタディーズは諸刃の剣となって自らをも含めたあらゆる差別と抑圧に目を向けようとしているのであり、その危険性を視野に入れながらマイノリティのエンパワメントを目指す運動を進めるための新しい理論を生み出すのに貢献している。

4 おわりに

アメリカ統一理念の主流は、同化主義を押し進める「メルティング・ポット」から多様性を尊重する「サラダ・ボール」へと変わってきた。集団主義に対する批判者は、アメリカはもう一度「メルティング・ポット」の方向性へ進むべきだと主張している。しかし、人種とエスニシティは、これまでそうであったように常に新たな視点と批判を巻き起こしながらこれからもアメリカ社会において問題にされ続けるであろう。

それでは、アメリカにおけるエスニック・スタディーズと多文化主義の経験を通して、日本においては今後どのようなことが課題とされなければならないといえるだろうか。まず、日本では、単一民族神話を賞賛し均質性を誇りとする傾向がある。1985年の『外交青書』は、「我が国のように……人種、言語、文化がかくも同質であり……中流意識がかくも広く行き渡っているということは世界に稀

¹⁸⁾ Lowe, Lisa. *Immigrants Acts: On Asian American Cultural Politics*. Durham: Duke University Press, 1996. pp. 64-67.

¹⁹⁾ Omi, Michael, and Howard Winant. *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1980s*. New York: Routledge, 1986.

なことである。この単一民族国家と称される我が国の特質は、戦後40年、その復興と成長の過程において、総じて大きなプラスとして働いた」としている²⁰⁾。しかし、このような均質性は社会にゆがみを生じさせ、単一民族神話は日本社会の発展を支えてきた多くのマイノリティの貢献を不可視化させてきた。「内なる多文化」を日本社会が受け入れ、多様性を尊重する意義を見直すためには、日本においてもマイノリティによる日本社会への貢献を掘り起こすことが必要である。

また、日本でも同化主義に抵抗してマイノリティによる文化を守る闘争があった。例えば、戦後日本に残り住んだ朝鮮人は子どもに朝鮮の言葉や文化を学ばせるため全国各地に朝鮮学校を設立した。ところが、1948年に文部省は朝鮮人児童にも日本の教育内容を義務づけ、民族学校は強制的に閉鎖された。大阪では警官隊が抗議運動を行う群衆に向けて銃を乱射し16才の少年を射殺する惨事となった。その後、一部の日本の公立学校には朝鮮人児童・生徒のために課外活動として民族学級が設けられ、朝鮮人講師による民族教育が行われるようになった²¹⁾。現在大阪府下の公立学校において新たに民族学級設置校が増えてきている。民族学級はマイノリティの側を対象とするマイノリティ教育であるが、それが学校全体、社会全体を巻き込む多文化主義に発展する可能性をどう見出していかも今後の課題となるだろう。ともあれ、さまざまなマイノリティが社会の中の目に見える構成員となることは日本社会がまだ乗り切れていない大きな課題である。

主要参考文献

- 明石紀雄・飯野正子『エスニック・アメリカ』有斐閣、1997年
 有賀貞編『エスニック状況の現在』日本国際問題研究所、1995年
 石朋次編『多民族社会アメリカ』明石書店、1991年
 関根政美『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会、1994年
 タカキ、ロナルド(富田虎男監訳)『多文化社会アメリカの歴史：別の鏡に映して』明石書店、1995年

²⁰⁾ 初瀬龍平編著『エスニシティと多文化主義』(同文館、1996年)212ページ。

²¹⁾ また、日本人教師によってもマイノリティの存在を通して自分たちの住む町を見直し、日本人とマイノリティの関係を考えていこうとする取り組みもあった。私が修士論文で上げたある公立小学校では、在日朝鮮人の子どもの文化とアイデンティティを活かした教育が、あらゆる教科と機会を用いて学校全体で行われたことがあった。徳原由美子『在日朝鮮人をめぐる教育—大阪市生野区のA小学校を事例として—』大阪大学言語文化研究科修士学位論文、1998年、参照。

- 野口道彦「エスニック・スタディの必修化と新保守主義ーカリフォルニア大学バークレイ校の場合ー」『解放社会学研究 4』日本解放社会学会編、明石書店、1990年
- 初瀬龍平編著『エスニシティと多文化主義』堂文館、1996年
- 松本悠子「アメリカ人であること・アメリカ人にするこゝとー20世紀初頭の「アメリカ化運動」におけるジェンダー・階級・人種ー」『思想』1998年2月
- Goldberg, David Theo, ed. *Multiculturalism: A Critical Reader*. Cambridge: Basil Blackwell, 1994.
- Lowe, Lisa. *Immigrants Acts: On Asian American Cultural Politics*. Durham: Duke University Press, 1996.
- Omi, Michael, and Howard Winant. *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1980s*. New York: Routledge, 1986.
- Petersen, William, Michael Novak, and Philip Gleason. *Concepts of Ethnicity*. London: Belknap Press, 1980.
- Salomon, Larry. *Roots of Justice: Stories of Organizing in Communities of Color*. Berkeley: Chardon Press, 1998.
- Takaki, Ronald, ed. *From Different Shores: Perspectives on Race and Ethnicity in America*. New York: Oxford University Press, 1994.
- Yetman, Norman R., ed. *Majority and Minority: The Dynamics of Race and Ethnicity in American Life*. Boston: Allyn and Bacon, 1991.